

## [ 編集後記 ]

笹澤 豊

筑波大学は開学 30 周年を迎える。十年一昔という言葉があるが、技術革新のテンポが速い今日では、十年の開きは二十年、三十年の隔たりとして体感されるのではないか。とすれば、我が筑波大学の開学が、はるかな昔の出来事として感じられたとしても、不思議ではない。

私が筑波大学に着任した二十年ほど前 ということは、二昔前 には、「開学当初は、雨が降るとキャンパスが泥水でぬかるみ、長靴が欠かせなかった」というような話が語り継がれていた。こういう苦労話は、今の若い教職員や学生諸君にどう映るのだろう。

三十年という時の経過は、一つの時代、一つの世代の移ろいを意味する。折しも、国立大学が軒並み法人化される時期が刻々と迫っており、国立大学としての筑波大学もそろそろ終焉の時を迎えつつある。そのあとの筑波大学、第二世代の筑波大学には

どういう未来が待ち受けているのか。どういう未来が開かれるのか。

教育と研究の両面にこれまで以上に競争原理が強く働くようになる結果、いろいろと多難も予想されるが、「災いを転じて福となす」という諺もある。いずれにせよ、本学の未来はひとえに全教職員と学生諸君の双肩にかかっていると言えるだろう。

(ささざわ ゆたか)